

三十日間  
將棋獨習新法  
乾

特41

823

076188-001-2

特41-823

將棋獨習新法 (三十日間)

浜島 龍水/稿

乾

M26

CEP-0243

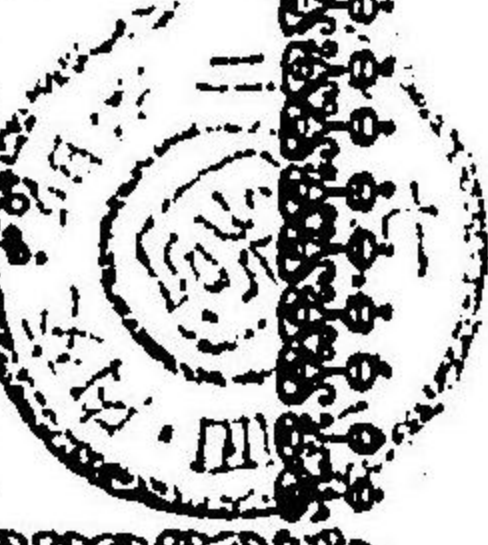


三十 將棋獨習新法の序

夫江將某の世に行はるゝや最も久しくして且つ之を弄ぶ人は世に太だ多し、惟ふに世に五人の断びて以て心を樂め情を慰むるもの茶道、插花、琴、弦、鼓、笛、謠曲、舞踏等の類多しと雖も此れ等のものは唯一小部分の人に弄ばるゝに過ぎざれば則ち未だ能く將某の如く多くの大々に断ばるゝものと見認む可らざるあり、殊に況んや其興味を以て彼の茶道插花琴弦鼓笛謠曲舞踏等に比すれば更に快樂多くあるに於ては南無講解かなる處、或は寒燈花結ぶの時、盤上の駒の勝敗を争ふは是れ

何等の快樂ぞ、蓋し此快樂は他に決して求ることを得ざるなり、將某の能く世に行はれて多くの人々に弄ばるゝ、所以のものは決して偶然にあらざるなり、然りと雖も將某なるものは指習はせして此道に熟達し得らるべからず、必や能く之を指習ふて其伎を熟達し力量弱きより強きに進まば則ち其快樂は更に前日に數倍然れども常

將棋獨習新法の序



に之を指習はせして何ぞ能く茲に至るを得んや、然るに人生の多事なる唯だ一に將  
某の習學に日子を費すを得ず是れ古來幾多の定跡書の坊間に行はる、所以とす、星  
移り物換る今の時に當りては古の定跡書は既に陳腐に屬して今人の好尚に適せざる  
のみならず古來の定跡書は實際初心の人をして基道に熟達せしむるの体裁を具ひし  
ものと謂ふを得ず、其初心の人の憾ぬること幾許ぞや亦た深く思ふべきあり、茲に  
於てか余が二十餘年來深鑑考研する所を伊東氏に筆記せしめ稿成りて世に公けにす  
若し夫れ之を古今坊間に行はる、定跡書に較べ來る時は其町寧緻密に文章を以て深  
甚の口傳定法を指示し殊に其指方に至りても亦た舊套を脱して新機軸を出したる所  
を記したれば今の時に於て將基初學の人の必ず讀む可きもの特に此書を措て他に之  
あらざるを誘るも亦可なるを信するなり仍て此由を卷首に記して序文と爲すと云爾

明治廿六 初夏

濱島龍水識

### ○ 凡 例

一余の初め濱島龍水氏の口傳を受けて此れを筆記し稿成るや先づ其体裁を定めんと欲し古  
今某道名人の手に成る定跡書を見ること無慮數百種の多きに及べり然れども其一も余が  
意を満足せしむるに足るものなし茲に於て一日山本新次郎君を訪へ余語るに件の事を以  
てしたるに山本君の曰く古來將基の名人上手多しと雖も文才ある人に至りては一も之あ  
る無し坊間に行はる、定跡書の儘に數字を以て盤上駒の運行を指示するに止まるものは  
れ將基の名人上手が文才なき蹟を徴するに足れるにわらずや余此言を聞き釋然として覺  
る所あり即ち繁簡折衷して別に一種の体裁を整ひ漸く此書を成せり讀者若し古來坊間に  
行はる、定跡書と較べ玉はゞ此書の勝ること萬々なるを知り得たまふ可し

一此書は將基初心の人をして僅少の日數内に能く初段以上の伎倆に上るを得せしむるの目  
的にて著作したれば行文盡く皆な下手の心得べき事のみを記せり偶々上手の指手に關  
し記したる所なきに非されども庶は上手の心得にせんと欲して記したるものにわらずし  
て下手の指手に最も肝要の關係ある分に限り記したるものゆえ其積りにて之を讀まれん

ことを乞ふ

一山本君又余に語りて曰く「我國將碁の始まりて以來幾多の名人上手世に出しも碁道の最も進歩したるは徳川氏第八代將軍吉宗の時にあり蓋し吉宗は頗る碁道に達し八段の力を有せり随つて近從の士人皆な碁道を善くし苟くも之を知らざる者は天下に齒ひせられざるもの觀ありしと其將碁の盛んに行はれしこと推て知るべきなり後ち天野宗歩江戸より起りて大に將碁の指方を改良し千古の名人上手を其後へに瞻然たらまむるに至れり而して今又進歩して多少の指方に改良を見る故に足下碁道に關す書を著さんとせば此意を以て著作せよ」と余君の教へを忝く誦して去る、山本君は頗る碁道の達人にして方今濃勢尾三諸國に於て斯道の牛耳を取れり茲に一言して君の厚意を謝し併せて其名聲を大方に鳴すと云爾

伊東洋二郎記

將碁獨習新法目錄

- 第一章 將碁の起原(乾の卷).....一頁
- 第二章 將碁を學ぶ心得.....四頁
- 第三章 碁道の敬禮.....六頁
- 第四章 碁碁十四訣.....七頁
- 第五章 盤面の紋符號及駒の合符.....十頁
- 第六章 習學の方法.....十四頁
- 第七章 習學時間.....十五頁
- 第八章 習學科業.....十五頁
- 第九章 習學上必要の器械及場所.....十六頁
- 第十章 學習科目.....十七頁

△第一科 指手種類.....十七頁

○石田流 ○雁木 ○美濃通ひ ○高櫓 ○相櫓

- 檐崩し
- 左四間
- 向四間
- 向四間裏
- 四間飛車
- 三筋飛車
- 向飛車
- 袖飛車
- △第二科 駒落種別……………四十七頁
- 六枚落
- 五枚落 左桂除
- 五枚落 右桂除
- 四枚落
- 二枚落
- 飛香落
- 左香落
- 右香落
- 飛車落
- 角行落

△第三科 詰手定跡(坤の巻)……………七十一頁

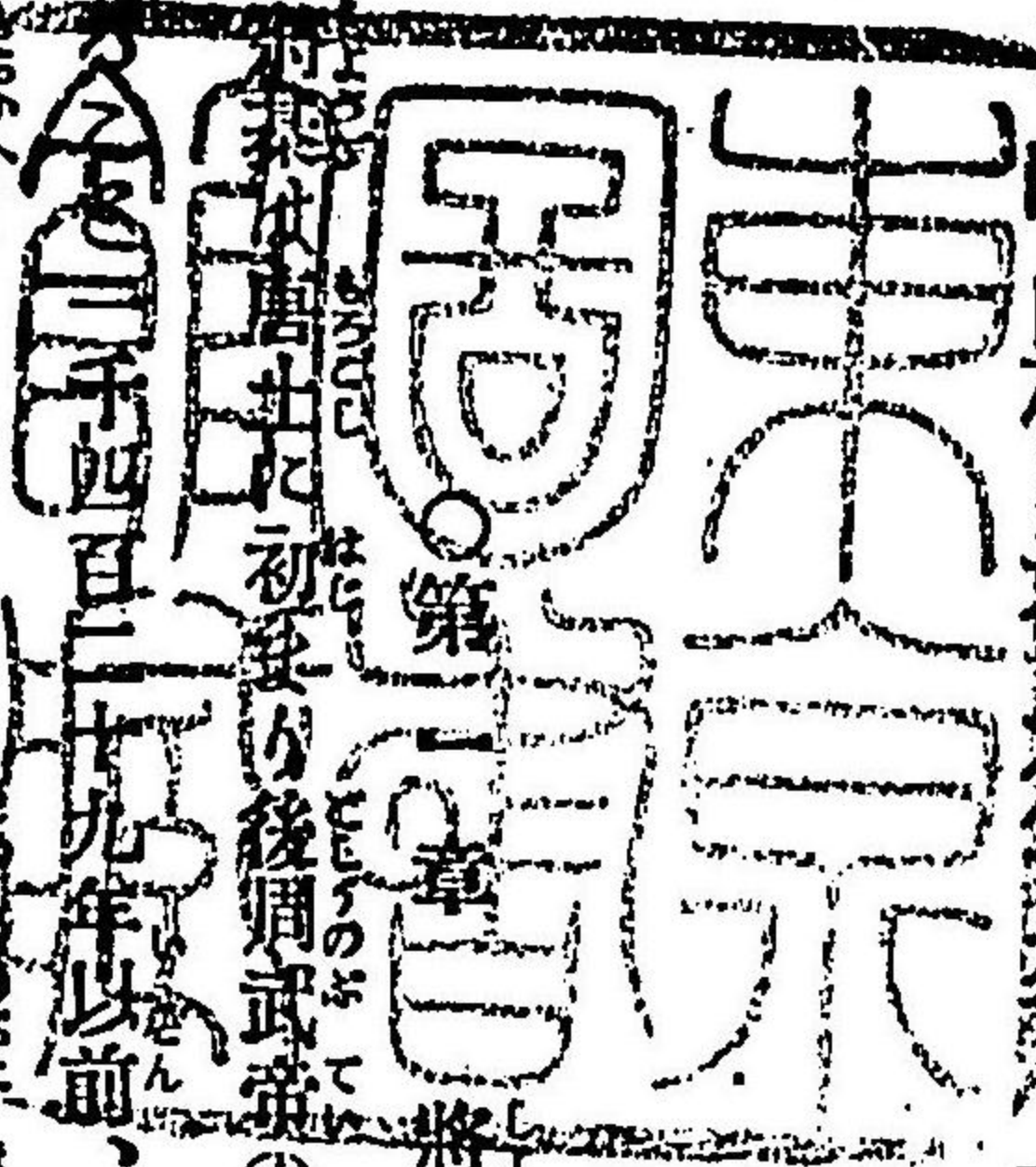
●第十一章 將基格言……………百十九頁

●第十二章 基道の洒落……………百廿三頁

將基獨習新法目錄終

三十將基獨習新法 乾之卷

五段允可 濱島龍水稿接  
無段 伊東蓮窓筆受



將基の起原  
將基は唐土に初まがり後周武帝の工夫發明し玉ふ所に係り、其我日本國に傳はりしは今を去  
るに千四百三十九年以前、即ち雄略天皇九年に吉備公が唐土に赴かれし時に此將基を  
持歸られたり。是れ實に我日本國に將基の傳はるに至りたる起原とす、然るに吉備公が持  
歸られたる將基は王將の頭に醉象駒あり金將の頭に猛豹の駒あるを以て、甚だ差し悪きの  
みならず興味も亦た從つて薄き感ありたれば、當時匡房卿は其駒組に付き種々工夫を凝し  
醉象猛豹の駒を取除きて差し試みられしに前の差し方と異なりて大に差し善くなりしのみ  
ならず、其興味も亦た前の差し方より多く之あるより、從つて世上に之を翫ぶ者あるに至  
れり

蓋し將棋は一種の雅伎に屬すと雖も、其駒の排列及進退動作は全く兵法に則りたるものなるに依り、士人にして之を斷ふ時は居ながら進軍追討退守防衛の戦法を究め、坐して神機妙算奇正策略を施すの法を知るの利益あり、左れば織田信長公の執權となるや將基所と云へる一の公廳を設置し、廣く世上より將棋の名人上手を登用して將棋師範の官職を帯ばせ、以て盛んに有志の士に將基を習はせたりき、後ち豊臣氏に至り又徳川氏に至りても頻りに士人に將棋を傳習し、且つ斯道の名人上手の伎術を獎勵することは最も能く之を努めたりしなり、當時將棋を以て一世に獨歩せしは大橋宗桂なり、宗桂初め織田公に謁し後ち豊臣氏に用ゐられ後ち徳川氏に召され、非常の厚待寵遇を蒙り其中に就き徳川氏は毎年正月宗桂を幕中に召して其伎の妙を見らる、の例を遺され、宗桂の子孫に至るも亦た替りし事なかりしなり

夫れより後ち將棋の名人上手として世に現はれ出し者は、伊藤、天野、桑原、福嶋等の諸家其數甚だ多しと雖も亦皆な大橋家の系統者ならざるはなし、古史を按ずるに徳川氏に至りて世の將基名家を待遇する方法は大に整理し、伎術の優劣に據て等級を定め之を九等に

分ち（下に掲る段位駒落圖を參看せよ）第一等を九段名人と稱し、次を八段半名人と唱ひ、七段を上手と云ひ、六段を上手間と云ひ、五段を上手並、四段を強片馬、三段を並片馬、初段二段を手直りと云ひたりき今其位格の段階を圖して示

（圖 一 第）

									九段
								半名人	八段
							上手	香車	七段
						角行	香車	同上	六段
					角行	同上	同上	同上	五段
				飛車	同上	同上	同上	同上	四段
			飛車	同上	同上	同上	同上	同上	三段
		飛車	同上	同上	同上	同上	同上	同上	二段
	飛車	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	初段
香車	飛車	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	

せば右の如し而して名人となる者は某道一切の事務を統理し段階を授與する事を司せり、其名人なき時は伊藤、大橋、伊藤三家の家元協議の後ち段階を允許するを例となせども、其已れと同じき段階を他に授與するを得ざるの制なりしが故に、家元たる者は假令實子ありと雖も家業の基道未熟なれば、其任相當の者を撰みて養子と爲ま以て其家督を譲るを常とせり

徳川氏執政を廢めて、明治の世となるも亦た將棋の能く盛んに世に行はる、こと毫も往昔に譲らず、是れ蓋し棋道の妙能く人心を樂ましむるの徳あるに由らざらんや、否な當に人心を樂ましむるのみならず棋道の術能く人智を發達し考察を精密ならしむるの利益多く之あるを以て、時世の變遷は其窮まりなかるべきも特に棋道の能く世に行はる、ことは、千古其毫も相渝ることなかるべきなり

○第二章 將棋を學ぶ心得

夫れ將棋の技術たるや、双方總計四十個の駒を以て盤面八十一格の初を横行し機を視て變に應じ奇正策出して縦横舒卷千變萬化窮まり無きものなり、夫れ然り其千變萬化窮まり無

き裡に駒を驅りて相戦ふもの、焉んぞ運用の妙一心に存する所なきを得んや、然り實に運用の妙一心に存すと謂ふと雖も亦た其進退攻守法軌の據て以て則るべきものなくんばならず、是れ古今の名人上手が洪範を遺し又後進者は皆な其洪範に據て棋道を研究する所以なり、此の如く言ふ時は將棋の技術たるや學ばずして其法を知り得らるべきものに非ざれば、苟くも此棋道の妙を樂まんと欲する者は其法を學ぶこと決して之を忽かせにすべからず夫れ然り而して將棋を學ぶも、元來此某道は一種の技術なるを以て之を學びて其名人上手となり得ることは決して一朝一夕の業にはわらず、必ずや數年の歲月を費して以て漸く此れが上達を期すべきのみ、然れども人孰れも生業のあるあり何ぞ能く其生業を措きて一に貴重の歲月を費し將棋を學ぶを得べけんや、左り乍ら人世一種の娛樂を取り、或は思想を鍊る爲めの技術として夙に行はる、限りは之を學ぶ之を玩ぶことをせざるを得ず、隨つて又此れに上達することを冀はざるを得ず果して然らば將棋を學び其上達を期するには、僅少の日子を以てするより善きはなく僅少の日子を以て上達を期せんとせば、定時科業の方法に據るを可なりとす而して本書の主眼とする所も亦茲にあり、若し夫れ初學者にして眞

實に將棋を學び其上達を期せんと欲せば、正直に本書に記す方法を履行し其少しも違ふ所なく又倦む所なきに於ては、必ず三十日間にして能く將棋の段階初段の上に出んこと敢て疑ひある可らず

○第三章 棋道の敬禮

初學者が名人上手と將棋を指すに當りては、最も敬禮を重んじ聊かたりとも輕侮の心あるべからず、其碁盤に直る時は先づ凡そ我膝頭より五寸ほど間を置いて坐り衣紋を正ふし頭を少しく垂れ、何分宜しく教へを乞ふ旨の挨拶をして徐ろに指し始むべし總じて碁盤に對て居る間は思考を要すること多きが故に、煙草を喫ふて尙は思考力を扶け或は團扇を使ふて暑を嫌ふなご心に之を欲するとも、漫りに之を爲すは上輩に對して大いなる失禮なれば、若し煙草を喫い團扇を使ふ時などには宜しく相應の會釋あるべし、又碁盤に對したる上は勝負を争ふこと當然なりと雖も猥りに下手が上手の指し方に逆ふは非禮と心得べし、又下手の指したる駒の摸様に依りて上手が別に指し方を教ふるあらば、諷みて其教へに従ひ聊か背くことあるべからず、之を要するに禮は他を敬ふを主とするが故に下手が上手に對す

るには努めて敬ひの心を外に現はし、禮儀を亂さ、ること何より肝要と心得べきなり

○第四章 碁碁十四訣

第一 先察三形状

(解) 形状とは彼れと我れと盤面上棋駒の配置如何を視察することにて、此語の主要は苟くも輕躁に指すことなからん様にどの鹹めなり

第二 須視親疏

(解) 親疏とは我此駒を斯く指して次て我彼駒と勢力を合せ、或は我此駒を斯く指したらんには彼れ敵の駒は死地に陥るべきや否やと、總じて駒々の縁の遠いか近いかを云ふ故に、此心は碁盤に對しつ、ある間は、少しも忽せにすべからずとの謂ひ也

第三 審候三虚實

(解) 敵駒の指し方虚か實か、何れにしても謀計ある事ならんと思は、則ち審かに其虚か實を候ふて我方畧を定め、然る後に指し合ふべしとの意なり

(解) 棋駒の進退掛け引きは常に定つて正しき法のみ依るを得ず



第四 奇正互交

或は時として計略にかけて敵を負すの策をも、取らざる可らされども、要するに奇正唯夫れ宜しきを見て施すべしとの謂ひなり

(解) 我駒の殆き場合は之を避け、敵の方に少しなりとも不締りの所あらば、我れは進んで彼れを攻むるに躊躇すべからざる云ふにあり

第五 避殆乘隙

(解) 伴は偽りの義にて北は逃るを謂ひ、従は追ふの意なり、此誠の要は敵が我れを試みん爲めに欺計を施し逃る時は、我れ敵の跡を追ふこと宜しからざる云ふにあり

第六 伴北勿従

(解) 無益の駒を打たり或は謂れなき駒を奪はれたり、或は猥りに法に外れた駒の進退をする事は、宜しからざるの謂ひなり

第七 冗濫不苟

(解) 取らるべく思はれぬ駒を奪はれ、又は奪はるべく思ひし駒を取り去られぬ事あるは、唯た是れ自然の理數に任するより外なきを云ひしなり

第八 與奪是命

(解) 假令一步たりとも我駒にして之を敵に取らる、時は、我れの全体に影響を興ふべきは、是れ甚だ看易き道理とす故に一步の取られんとするも駒を濟ふ時は、其利我れの全体に及ばし又樞要の所にあらざるも、之を取らる、時は我れの全体に害を及ぼすに至るべしと云ふにあり

第九 濟敗共並

(解) 我駒に應援せしめんが爲め打つ駒は、成るべく其應援せられん事を待つ所の駒と、縁近きを要すとの義なり

第十 援勢於適

(解) 闘ひの線形長くんば其半ばより割き断ちて、敵の勢ひを挫くを云ふにあり

第十一 長線横断

(解) 王將の居る陣營は、必ず相應の守衛あるを以て懋ひに之を攻め落さんと欲せば、反つて敵の守衛を堅ふせしむることあるに付き、苟くも王陣を攻めかければ一躍して微塵に打破る丈の策立ちたる上にすべしとの謂ひなり

第十二 王陣宜挫

九

第十三出圍利開

(解) 總じて敵に圍まれんとし、若くは既に圍まれたる時は一に唯だ血路を開き逃るに便利なる方略を用ゐ、決して更に其血路に衝る所へ贅駒を打ち、或は居駒を向けなとして血路を塞ぐとあるべからざるを云ふなり

第十四防守於險

(解) 敵より攻めらるゝを防ぐには、險固なる所を能く擇み分け其處に據て以て、敵の攻むるを防ぎ守れとの義なり

第十五厭驅二伏駒

(解) 俗に待駒を使ふは棋道に於て最も厭ふべく忌むべき所と爲せり此上の語も亦た駒待駒を設けて勝ちを制せんとする拙陋を戒めたるものなり

○第五章 盤面の紋符號及駒の合符

將棋を學ばんと欲せば、先づ盤面の紋符號及駒の合符等を詳く知り居らざる可らず、其之を知りて而して碁道を學ば、速かに總じて駒の進退運動に於る利害得失を計り知るを得るの便あれども、若し夫れ之を知り居らざる時は如何に碁道に刻苦研磨する所あるも、亦た

能く速かに上達する事を望むべからざるなり、故に曰く將棋を學ばんと欲せば先づ盤面の紋符號及駒の合符等を詳く知り居るべしと

(圖 二 第)

九一	八二	七三	六四	五五	四六	三七	二八	一九
九二	八三	七四	六五	五六	四七	三八	二九	一〇
九三	八四	七五	六六	五七	四八	三九	三〇	一一
九四	八五	七六	六七	五八	四九	四〇	三一	一二
九五	八六	七七	六八	五九	五〇	四一	三二	一三
九六	八七	七八	六九	六〇	五一	四二	三三	一四
九七	八八	七九	七〇	六一	五二	四三	三四	一五
九八	八九	八〇	八一	六二	五三	四四	三五	一六
九九	九〇	八一	八二	六三	五四	四五	三六	一七

今左に掲ぐる第二圖は盤面の相紋にして、此れに初め駒を並ぶる方法は第三圖の如くする



して此變化を見るに

秋の處七桂八角 ナル全銀二銀五歩全歩五歩全歩七角打七歩全角三飛五歩打三歩四桂七歩 ナル五歩 ナル  
四と五と全王五金打四王八角引三飛 ナル六飛 又冬の處七桂二角 ナル全銀八銀五歩全歩三歩打全飛二  
角打一香九角 ナル二角打三金 又いの處五歩五歩五歩全歩七歩五歩七飛 又ろの處五歩四桂八角  
ナル全銀二銀二歩打全飛三歩打三飛四角打七角打全角全銀四角打全飛全歩六角七歩四角  
の類にて前ふ傍記する秋、冬、い、ろ等の字は、即ち駒組の變化する場所を示す符號と知  
るべきなり、第五圖は駒字合符にて此れ等は別に説明を要せざるも亦た能く棋道を學ぶ者  
の知り居らざる可らざるものなる事を知らん

○第六章 習學の方法

本書に據て將棋を習學するには業務の餘暇僅少の日數を以て、初段の段位に上達せしむる  
を期するものなるに依り、努めて毎日二時間又は四時間ツ、習學するを要す、斯く習學時  
間を定め科業を嚴肅に履行し少しも之を紊すべからず、若し日々定時の習學時間中に諸科  
の分界を亂り、得手勝手のものを目指し學ぶ時は決して其上達を期し得べからず、是れ大に

警むべきなり次に準備調度を爲すに當りては即ち將棋を學ぶに必要なる物は悉く皆な之を  
備ひ付けべし、此の如くして將棋を習學するに於ては其能く僅少の日數を以て、初段の段  
位に上達するに至ること敢て疑ふべからざるなり

○第七章 習學時間

習學時間を一日に二時間と定め、一週間に一科を習學したるを期すべし既に一週間に一  
科を習學したるを期せば、即ち三週間にして全く三科の棋道を習學したはりて初段の格  
位を得るに至るべければ、習學時間は一日必ず二時間ツ、と定め漫りに伸縮すべからず、  
然るに若し自分勝手に習學時間を伸縮することあらば設ひ何程刻苦するとも、碁道上達す  
るの効なかるべきに依り其心得にて習學時間の規定を紊すべからず

○第八章 習學科業

棋道を習學するに當りては必ず分類したる科業に依りて、其順序を紊すことなく能く意を  
注ぎて習練すべきなり、凡そ何れの學問も淺きより深きに及び易きより難きに赴き以て習  
熟を期すべきものなり、而して將棋を學び其上達を期せんと欲せば最も善く淺深難易の順

序を踐み習ふを要す、安んぞ規定したる科業順序を紊して可ならんや、今本書に記す科業の分類も亦た淺きより深きに及び、易きより難きに赴くの順序を整ふるに付きては最も深く研鑽したる所あり、故に此分類せし科業の順序は決して之を紊すべからず、必ずや此順序の如く之を習學すべきなり

○第九章

習學上必要の器械及場所

將棋習學上必要の器械と云ひば、先づ其盤駒等を備ひ附さる可らざるは勿論の事なれども亦た尙ほ硯箱一具備忘帖一冊を備ひ置くを要す、而して場所は閑靜幽清の室を撰み此處に盤を据へ、其れに對するに當りては先づ名香を傍らに薫らし此書に依りて以て深く思ひを潜め考ひを凝らして、頻りに獨り將棋を闘はすべし尤も習學定期時間中は決して他の事を思ひ出し、或は人に對して談話など爲すべからず、唯た一に將棋盤上駒の運行如何の事のみを專はら心を注ぎ居るものとす、故に將棋習學し始めてより全科を卒るまでの間は、平日よりも成るべく色慾を斷ち酒食を減じ腦裡の作用を鋭くし記憶力を富まし、將た機根を熾んにして聊か倦飽の心を起さざる様にすべし、此の如くして其道を習學する時は其設ひ

獨習なりと謂ふと雖も、亦た能く將棋盤上駒の進退する規矩秘訣を會得するに至るべきなり、若し此書を見つ、駒を組み行き半ばに至り、其駒の運行此書に記す如くならざる時は乃ち其時の駒組概圖及持駒の個名等を備忘帖に記し置き、尙ほ熟考して幾たびも差し試みべし、決して中途に倦飽の心を起し之を止むるが如きことあるべからず

○第十章 學習科目

△第一科 指手種類

凡そ世上の事物は、皆必ず法則ありて以て種々の作用を爲すものなるが故に、此法則に従はざる時は決して能く其作用を見るを得ず、特に將棋は最も正しき法則を具ひ居るものなるに依り、將棋を齎る者は必ずや此法則に據らざるを得ず、亦た以て世の將棋を習はんと欲する者は、先づ其法則を知らざる可らざるの必要あるを察すべきのみ

今夫れ將棋の指し手を幾許ありやと云へば、則ち將棋なるものは彼の兵法と同じく奇正虛實千變萬化、手を替ぬ術を換ね指し來り突き去る處、他より得て之を測り知るべきにあらす故に其指手の數を幾許と算ふることは、頗る理なきが如しと雖も其實は指し手數の定ま

將棋指手法

○第十章 學習科目 △第一科 指手種類

り居るものありて、猥りに之を動かし得べきものに非ず將棋を習はんと欲する者は能く之を知り居らすんばある可らず、仍て今左に將棋の指し手数を見易く表に作りて示すべし

手		平	
石田流	雁木	美濃通ひ	高櫓
相掛り	四間角替り	四間の裏	向四間
左四間	櫓崩し	高櫓	美濃通ひ
雁木	石田流	相掛り	四間角替り
飛車落	角行落	飛車落	飛車落
四筋居飛車	銀冠り八五歩突す	居飛車引角	飛車振替
三筋飛車	銀冠り飛車先早突	飛車振替	居飛車先早突
五五歩突越四筋飛車	右王	居飛車先早突	四間飛車先早突
三筋飛車	左王銀冠り	飛車振替	居飛車先早突
銀冠り八五歩突す	櫓早崩し	居飛車引角	飛車振替
四筋居飛車	右香落	左香落	左香落
三筋飛車	角道留	鳥指し	三筋飛車早浮
銀冠り八五歩突す	角早替り四五打直し	角早引	四筋飛車角替り
四筋居飛車	角道留	端飛廻り	三筋飛車早浮
三筋飛車	居飛車端指し	四四角上り	鳥指し
銀冠り八五歩突す	袖飛車まかへ	角早替り四五打直し	角早引
四筋居飛車	袖飛車まかへ	角道留	端飛廻り
三筋飛車	居飛車端指し	居飛車端指し	鳥指し
銀冠り八五歩突す	袖飛車まかへ	袖飛車まかへ	角早引
四筋居飛車	袖飛車まかへ	袖飛車まかへ	端飛廻り

以上に掲げるが如く將棋の指手数多く之ありと雖も、亦た之を要するに將棋指手駒立の法式は石田、雁木、美濃通ひ、高櫓、相櫓、櫓崩し、左四間、向四間、裏四間飛車、三筋飛車、袖飛車等の十三種類に止まるものとす、此十三種の指手は種

第五圖

正	王	飛	角	金	銀	桂	香	士	王	紋
略	王	飛	夕	人	ヨ	土	禾	、	王	略
符	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	符
号	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	号
成	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	成
符	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	符
号	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	龍	号

々の駒立に分る、と雖も、其分る、ものを仔細に吟味し來れば即ち本法に歸せざるを得ざるの道理あることを知るべし。喩へば彼の相掛りの將棋種類を算ふれば幾んど百五十種類餘の多き種類あり、然れども本と是れ六七飛と七五歩と指手より分れて彼れか如く種類多くに分れたるなり、將棋指手の本法たる豈に多くの種類ある可んや、唯た僅に十三種類あるに過ぎざるものなり

故に是れより以下に載する所の差手種類を、最初十三日間内に毎日一圖ツ、二時間又は四時間ツ、獨習し、第一科の差手種類を悉く暗んするまでに成るを要す、蓋し此事たる頗る難きに似たりと雖も食欲を制し淫情を抑へ、嚴に自ら科業時間中は諸般の情欲を強伏して以て専心獨習に従事せば、其差したる駒立を暗んするに至ること敢て難しとせず

五六銀の處を八六歩七二飛の順に行けば先手よし

日 一  
流 田 石

六二銀の時三五歩と突る、節は七八飛三二飛七四歩の駒順たるべし

香	桂	角						香
桂	王	銀	金					桂
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
飛			銀	飛				飛
					歩	歩		
		歩	歩	歩	歩	歩	歩	
歩	歩	金	銀	銀	歩	金	飛	歩
		玉						
香	桂	角						香

田 田 田

居 飛 車

(説明) 六歩三歩七歩六銀六歩六歩七飛六銀七飛五歩九歩九歩七銀四銀七銀五銀八王四王三王  
五左 金八歩七角三角七桂七金八王三金八銀五金四歩四歩五銀四金五歩

(變化) 五歩ノ次五歩同銀六歩五歩八歩七金四歩七歩同歩六銀三歩三桂七桂四歩六歩  
飛ノ處五歩八銀四銀七銀五銀四王四王三王三王五金九歩九歩七桂四歩八王二飛七角九桂三銀八桂五  
桂八歩五銀九歩  
五歩六銀五歩

名人大橋宗英翁の説に「凡そ石田流は先手に遊ぶあるゆえ差にくし、近來好まざる組みな  
り」と夫れ或は然らん、何となれば一應石田の駒組みを視れば頗る堅牢なるに似たれども、  
若し敵方飛先きに金を上り來らる、時は石田の駒組如何に堅牢なりと雖も、忽ち破らる、  
ものゆゑ其心得にて善き策を別に回らす所なくんばある可らき、石田流に早石田と稱する  
駒立あり此れは初め雁木に組みて後ち六八王と退く時五八金と上り石田に立直すものなり、  
若し此駒立にて向はる、時は相手方一時狼狽る事あり能く心得べし

六四歩と突き七四歩と差し  
七三桂と上ることを考ふべし

二雁  
日木

七三銀萬鈞の力あり七五歩  
に口傳あり

桂	香	桂	香	桂	香	桂	香
飛	桂	飛	桂	飛	桂	飛	桂
銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀
王	王	王	王	王	王	王	王
金	金	金	金	金	金	金	金
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂
香	香	香	香	香	香	香	香

居飛車



(説明) 七歩三歩六歩四歩二歩三角四銀三銀六歩四銀三歩五歩六歩八王六銀七王五銀八銀二飛七銀六王  
 七角七王八金五左 金六歩四歩三銀  
 九角二王八金二 金六歩四歩三銀

(變化) 三銀ノ次八王五歩五角四銀同銀三歩四銀四歩七金四歩六歩六歩三金七金四歩八王八歩七金  
 七桂八歩三王七王四角四歩同銀三銀六歩同歩同桂六銀八歩五歩五歩一五歩ノ處三歩をつさる二飛を  
 三四銀の次にさす口傳あり

此雁木の駒組みに最も注意すべきは、角の開きより王の頭へ惱みを附る心得にて差すこと  
 是れなり、又二八、八二の飛車を廻して角の替りを止むることは是れ賊に肝要の手なれども、  
 手透す時は敵より差し寄せらるゝに付き其飛車の進退は軽く仕掛け置くべし、或人曰く「雁  
 木を破るの妙手は古來一も無し熟ら數年の間實驗する所に依れば、此雁木を破るには唯た  
 飛車先をより金を上り金飛合同して敵に當るの一法あるのみ」と總じて金を飛車先きに附  
 る差方は飛車の働きを十分ならしむるの効あるものゆえ敵の堅固なる要害を破るには最も  
 妙なり、初心の者能く之を心得置へし

五四銀の駒立深く考ふべし

# 三 日 美濃通ひ

此六二銀上らざるも先方は勝ちなり

香	桂	銀						香
歩	角	玉	金	金				
歩	歩	歩	銀	歩	桂			
歩					歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
桂	王	銀			飛			桂
香	桂	金						香

〃 雁木美

五四銀

(説明) 七歩三歩六歩四歩四銀二銀、六歩三歩七銀四銀三歩二飛六銀二王八王三王七王五左金八五右金  
 八王八金二銀一歩四歩五歩四銀七桂四歩六飛六金九歩四歩五歩

(變化) 五歩ノ次五歩五歩同歩四歩同歩三歩同桂八角三飛四飛二銀ノ次五歩五歩六歩四歩三歩四飛六王  
 六王七王二王八金五金ナル五歩五歩五角二王八角七銀二歩三歩三桂四歩四歩五歩五歩二桂二角三  
 歩三角三桂ナル三角二歩ナル

此美濃通ひの駒組は考慮すべきこと最も多しとす、殊に端の手は勝敗に一大關係あれば深  
 く考ひ差すべきなり、古來此駒組みの慣例として二四香と差し二四桂と打つことなるが是  
 れ甚だ思ひべき者とす、其然る所以を云ひば此美濃通ひの手は端の方に差方口傳あればな  
 り、故に此手は決して上手へ向ふて指す可き者にあらざるを知る可し、或は曰ふ、敵櫓に  
 組み指來らば之に對するの手は美濃通ひより外になしと是按するに美濃通ひの駒立は用意  
 の深重なる所あるに由るなり、若し夫れ初心の者にして能く此指方の蘊奥に通せば、蓋し  
 用意の深重なる駒立此美濃通ひの外になきを知る可し

早四間は五一金三五歩にて  
 位勝ちなり

四 高  
 日 櫓

櫓の駒立は八五の桂にて勝  
 ちなり

香	桂					桂	香
	飛		銀		銀	王	
			歩		歩	歩	
歩		歩		歩	歩	歩	
	歩				歩	歩	
		歩	歩	歩			歩
歩	歩	銀	金		歩	銀	
	王	金					飛
香	桂	角					桂

居 飛 車

居 飛 車

(説明) 四歩七歩八歩六歩五歩七角三銀七銀八銀五歩六歩四歩八角三角七銀五右 金五金三銀八金四王七金  
 三王二歩三金五歩二銀九王二王九王三金八銀四歩八王四歩六歩三銀六歩七歩  
 二王六歩三金五歩二銀九王二王九王三金八銀四歩八王四歩六歩三銀六歩七歩

(變化) 七歩ノ次五歩同角七歩四角七銀四銀五歩同歩同角 一六歩ノ次二銀八銀六歩七銀六銀五  
 金四歩五歩五歩五金八銀四王二歩三銀八王三王八王四歩六歩四歩七金四銀九角二飛五歩三桂六歩五桂八  
 銀五歩

七七銀と上らば櫓と知る可し、先手方より六四歩と突く時は請方に於て相櫓に組む可らず、  
 古人曰く、高櫓を待ふには早四間を以てすること妙なりと實に然り抑も高櫓の駒立は一方  
 に敵兵の攻撃を受けつ、王方は順次に敵領に侵入するに便宜なる駒立ゆえ、之に對する  
 には早四間の仕掛けを以て我銀桂を利用し飛車は其銀桂に力を合して敵の高櫓を攻め立る  
 こと肝要なり、若し居飛車の侍ひならば角替るの考ひを回らすも可なり、然れども上手方  
 より先きに角打ち込まる、隙のらば下手方は負けになるべきゆえ注意すべし

桂金替るの手わり高く眼を着  
 けよ

日 五 相  
 櫓

桂	香	王	飛	桂	香	桂	香
飛	桂	王	飛	桂	香	飛	桂
銀	桂	王	飛	桂	香	銀	桂
金	桂	王	飛	桂	香	金	桂
銀	桂	王	飛	桂	香	銀	桂
金	桂	王	飛	桂	香	金	桂
銀	桂	王	飛	桂	香	銀	桂
金	桂	王	飛	桂	香	金	桂

相やぐら

(説明) 六歩八歩七歩三歩六歩五歩七歩七角二銀五歩三角七銀四歩五歩二銀五金二金七左金二角六王三銀八銀六歩全歩全角全角全飛七歩八飛七王四歩七銀四金八王二王五歩三王六銀四金六直歩四歩九歩四歩七桂五歩五歩全歩全銀五歩六銀六歩全歩四打角

(變化) 春六歩ノ處四銀三王八飛二金五歩四歩全銀五歩七角三銀四歩二銀五飛四歩三銀四角八

飛九角ナル三角八飛夏七桂ノ處七銀五歩八金六歩全歩九角秋五歩ノ處九角八飛四角八馬四歩

相櫓は先手方より後手方に於ては最も深く用心して駒立をせざる可らず、然らざれば先手方に於ては後手方の油断を見すまし、中途より駒立を組み替へんも亦た知る可らざればなり、若し早く角替りしたる時は早く其角を使ひし方が勝ちと知るべし、若し相櫓にして指し勝利し難しと見れば袖飛車に直して敵に向ふも亦た面白かるべし、然れども斯くするには豫め袖飛車に直して勝利の心算あるにあらざれば之を爲すべからず

下手方五四歩頗る力あり

六日 志崩櫓

七九角を引く手意味深長



崩し手

崩し手

六日 櫓崩し

六日 櫓崩し

三三

(説明) 七歩三歩六歩八歩七銀四歩七銀六銀五左金六銀七金四歩五歩四銀六歩二銀七金六飛九王五  
 金四銀三桂二歩三角七角八桂二歩全歩全角全角全飛三角八飛五歩七角七桂全金ヨル六歩六角全金  
 (變化) 六金ノ次八飛四玉七飛ナル五金二歩七歩打全飛九角五飛七銀八歩五角ナル七王八銀全王一金  
 一玉七歩ナル歩八金八王七角全桂九馬 い四歩ノ次六歩四歩八銀二銀六歩二金六歩四歩七銀四金五  
 銀三銀

七七銀と上る時は櫓と知り、先手方より六四歩と突く時は後手方は決して櫓に組むべからず、必らず先手方に反するの手段を取ること肝要なり故に先手方は五一角の次に八四歩と突くか、又は三四歩の次に四六歩と出るなどは是れ深甚極秘の手段とす、或は六筋取込み五筋突き出しの極秘手あり此時上手方七八金なれば下手方五二金右を上り、若し上手方三八金と上る時は下手方七四歩と突き出す可し、然れども下手方七四歩の時に上手方七八金と上らば、下手方は四四歩と突き銀冠りの駒組みを善しとす

七 左  
 四 間  
 日

五四銀と歩を敷きて上る時は兼て六四歩と突き置くべし故に三四歩考ふべきなり

六五歩突き切る時は指方あり若し居飛より銀を上り三筋の仕掛けを止んとせば考ふべし

香	桂	銀	金	王	銀	桂	香
歩	歩	桂	角	銀	歩	歩	歩
歩	歩	飛	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	銀	歩	歩	歩	歩	歩
桂	飛	王	銀	歩	歩	歩	桂
桂	歩	歩	歩	歩	歩	歩	桂
香	桂	銀	金	王	銀	桂	香

車進居

左四間

(説明) 七歩三歩六歩六歩六歩七銀八銀五歩八飛五銀七角四歩五歩全歩全飛六歩打八飛四歩四王六金八王三  
 金七銀七歩五銀三銀八角一角七歩全歩全角四銀七飛七歩六角八歩五八歩七飛四王七桂三金七歩全歩同  
 飛六銀八飛八金七飛三王六歩六歩

(變化) 六歩ノ次全銀三桂五歩五桂全桂七角全角七金四歩全銀六角四歩打七角打四歩打三歩五金四  
 角全歩六歩全飛五銀七角と突さし時他より七銀と出れば五金の締りにても八角の上りにて  
 下手方よし

此駒組みに若し後手方五八金と上りし時は、先手方一三角と出つるを利とすれども、或は  
 然らずして後手方六五歩と突さし時は早く角替りして四四と角と打ち、又飛先さを通じ歩  
 を以て指すを最も得策とす、又此左四間の駒立に五二金と上るは淺見ゆゑ八三王七二金の  
 指順にて五二金と上るを當然なりとす、併し乍ら場合に依りては爾く玉を圍ひ過ぎて宜し  
 からざることもあれば、駕と敵の模様如何を見合せ指べきなり、又敵四二銀の時は四六歩  
 三角八銀の指順を以て向ひば宜きものとす

五々歩にて勝ちなり

# 八日向 四日間

此駒組み裏指方に於ては七  
 五歩よしと古來の言へ傳ひ  
 あり

桂	桂					桂	桂
	王	金		銀	銀	角	
	歩	歩	歩	銀	銀	歩	歩
歩				歩	歩		歩
歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩
	歩	角	歩	銀	金		
		玉	銀	金	飛		
香	桂		金				香

(説明) 六歩三歩二歩四歩四歩三銀八銀四飛七銀三角五銀五歩三歩四銀五左金六玉八王七王  
二銀六歩四歩八飛五銀七桂二左金二桂二角五歩五歩

(變化) 五歩ノ次四歩全銀スク五歩六歩四歩同銀三銀同角四角七歩ナル 同金五銀五歩六歩五歩八金四銀  
同歩七銀五飛四角打五飛四飛五飛八銀同金五歩同飛六角七飛六歩「いノ處六歩とつかずして八銀  
とさす手わり」ろノ處八銀とつかずして六歩とさし「はノ處五歩とつかずして三銀とさせ

ば六王六王七王七王八金五金三歩六銀八飛五歩七桂三銀九歩九歩一歩四歩一歩となるなり  
向四間には五一金の手終りの勝ちにて、六七銀八五桂八八角六五歩五八金は極秘の指方な  
り、若し八五飛の先さより仕掛け来らば六七銀と上り四六歩と切り六五歩ならば七八金に  
て宜し、總じて將基は先手後手位詰めの勝敗なれば其心得にて向四間の駒立に三五へ銀を  
上らずして三四角と上り、或は八六歩と突き切る等の手は甚だ悪し、之を要するに位詰め  
の負けにならざる様に指込み行かば敵は進退に困しむものなり

九日 向四間裏

此駒組に於て三五歩を突くは  
習ひ事なり又二歩を突ぬうち  
は三三へ角上るべからず

五々歩頗る妙手なり

香	桂					金		桂	香
				飛	金	王			
				歩	歩	歩			
				歩	銀	歩			
				桂					
				歩	歩	歩			
				歩	銀	銀	歩	歩	歩
				角	飛	金		金	王
香	桂								桂

(説明) 四歩七歩八歩六歩六歩六歩七銀七銀五歩七角五銀七銀七歩八飛六歩五歩五右金八王四王三王三王八銀  
 一歩九歩九歩六飛七銀三角五左金四銀八王三桂八金八桂八角五歩五歩  
 四歩四歩六歩二飛七銀三角八  
 (變化) 五歩ノ次六歩同銀六歩五歩四歩六歩五歩ナル 同銀六銀七銀同角六飛七打銀六飛六歩七銀九  
 飛六銀同銀同飛七銀六飛六歩  
 飛六銀同銀同飛七銀六飛六歩

向四間は表も裏も五一駒組みにして、角の方の桂を上り働かしむる心持に成り敵駒の邊りを考ふる肝要とす、若し上手方角替りして持歩を使はんと欲し下手方は五八金を上る手を施すか、又は角を一三八廻す指方にするか二者其一を撰ぶべし、古人曰く「向四間裏の手に五九金は見合す可く又早く寄るは宜しからず、都て駒組み歩切り角振り亂る、時は筋違ひに角打つ手もありと、真に然り此れ等の口傳を實地に應用せんと欲せば敵の仕掛を見ることが要す、若し見合せ附さる時は兎に角七四歩と突き切るもよし

十日  
 {車飛間四}

下手方一三八角上りて利あり

銀を七七へ上るも面白し

香	桂	金	金	桂	香
	王	銀	銀	王	
	歩	歩	歩	歩	
歩				歩	歩
			歩		
歩	歩	歩	歩	歩	歩
	歩	歩	歩	歩	
	銀	王	角	金	銀
香	桂	金		銀	飛
				桂	香

車飛間四

居飛車



(説明) 七歩三歩二歩四歩二歩三角八銀三銀五歩四歩五歩八金右四飛六玉二玉七玉九歩四歩六歩二玉七角七銀八角五歩八銀五歩全歩全角七銀三銀七銀三歩四飛三歩全飛四銀六銀四角四歩

(變化) 春五歩ノ處五イ金四歩三飛三歩ナル全銀七角全角全銀二歩三角四角五角ナル五金ノ處四飛四歩全歩全角四角八角二歩七角五歩ノ處三銀三桂四銀四歩全歩全角二飛三角ナル八飛四馬四歩五桂四飛五桂一金一桂全金五角打

茲に掲ぐる駒立は上手方雁木の駒組みへ、下手方四間飛車にて向ひたる有様を示すものに、抑も雁木を攻め破るの手は四間飛車より外に決して之なきものなり、若し上手方九七角八六角の手を指さば下手方は四一飛と引くを可とす、或は然らずして上手方五六歩を突き五七へ銀を上らば、下手方は中飛に立直し五四銀と上るべし又上手方二六飛と上らば、下手方は五三銀五二金と上りて受くを善しとす、尤も上手方初め厂木の駒立は、都合に依りて半橋に組み直すことあれば下手方は初めより其心得あるべし

五六銀上りて別に妙手あるべし

日一十  
車飛筋三

七五歩は習事なり

香	桂			金	角	桂	香
		飛				王	
歩			歩	銀	歩	歩	歩
	銀		歩	歩	歩		
歩		銀	歩	歩	歩	桂	歩
	歩		銀	金	桂	王	
		飛					
香	桂			角	金		香

(説明) 四步七歩六歩八歩七歩六歩五歩四歩七歩六歩七歩八歩七歩七歩四歩王八歩三歩王四歩二歩銀三歩三歩銀四歩銀五角七

銀二金八金左一四歩六歩九歩九歩七歩四歩四歩三歩四歩金四歩八銀三桂七歩九角七飛八飛七歩全銀ろ八歩全角全歩全飛八角

(變化) ろ八歩全歩八歩八歩全銀八飛七飛八飛七飛八飛七王七歩全桂八飛一八銀五歩全歩五歩七銀

五角六歩五銀左五歩全銀六飛六飛六歩全歩全角七桂四歩六角四角八飛八歩四歩二飛六歩

此三筋飛車の駒組みは我方を守るには利あれども、敵を攻むるに利あらざると云ふ事は古今達基家の皆な言ふ所なり、然れども引角の工合宜しく又六五の邊に金の上りあるに於ては、四間飛車の指方に比較して其大に勝るものあるを見るなり、須らく初學の者之を四間飛車と指試みて以て孰れか利にして孰れか不利なるやを知る可きのみ、若し三筋合飛車に組み飛角の内を替らんと欲せば、其替りて以て大に利なるや否やを判斷したる後にす可し、然らざれば反つて其替駒したる爲めに失敗を取ることあるものとす

三五歩四五歩より五二飛の仕掛とならば先手宜しからず

二十日向飛車

五五歩五六銀の指順にて來る時は後手に不利あり

皇			皇			皇		皇
	王	王				皇		
	皇	皇	王		銀	皇		
皇		皇	皇	皇	銀	皇		皇
						歩		
歩		歩	歩	歩	銀	歩		歩
	歩		銀			桂		
	角	王	金	金				
香	桂					飛		香

(説明) 六歩三歩二歩四歩五歩三歩四歩銀三銀五歩五歩八金右四銀八王二銀七王五銀八銀二飛六歩二王  
 四歩七王六歩九歩七桂二金左六歩六歩四歩五歩六金七銀四歩六銀八王七銀二金八金スウ七桂六歩四歩九飛一  
 角四歩全銀右四飛六角春六歩全歩四銀五歩七角三銀四歩二銀三銀

(變化) 春六角ノ處四飛六歩全歩四銀六角四銀全銀四歩全飛五銀四飛三銀全金五金打夏五歩ノ

處五角四銀四角四角四銀八角打六角打四桂四銀五歩打

向飛車の駒組みは先手後手共に大に手あるものにて、五三歩と先手に於て指さば是れ敵の  
 角道を止むるに利あり、又三六歩三四銀の指順は後手に於て敵の飛角を十分働かすことを  
 得さらしむ防ぎを爲すに得策なり、蓋し向飛車の駒立は最も飛車の働きを初めより期する  
 ものゆゑ、之に順じて歩銀桂等に至るまで捌きを善くすること肝要なり、左れば中興基道  
 の名人天野宗歩の言に「向飛車は後手方駒組みの出来上らざる内に四五歩と突き込みの工  
 夫専一なり」と誠に至言と謂つべし、若し夫初心の人此言を味はゞ大に覺る所あらん

端に妙手あり

# 三十日 袖飛車

七五の歩習ひあり

香	桂	飛	金	銀	歩	歩	香
桂	飛	金	銀	歩	歩	歩	桂
金	銀	歩	歩	歩	歩	歩	金
銀	歩	歩	歩	歩	歩	歩	銀
王	桂	飛	金	銀	歩	歩	王
桂	飛	金	銀	歩	歩	歩	桂
香	桂	飛	金	銀	歩	歩	香

一 熊鷹

袖飛車

(説明) 四歩七歩八歩六歩六銀七銀五歩五歩七歩七銀八歩七角九歩九歩五金二歩三銀四銀四王五銀  
 三銀六歩三王三飛五銀七金四銀六銀一角五金七桂九王八飛六歩四歩五歩六歩同歩同角五歩六  
 角七歩七角同桂七歩五角九歩同歩七歩同銀八飛八銀全飛全金七歩八歩七歩全歩五桂六角九銀八飛五  
 銀全王七角八金六角七歩五桂

(變化) 九歩ノ處四王八銀三王七五銀四銀三銀六銀三銀五銀八飛四銀七金三角九王五金一七歩ノ  
 處七歩全歩八桂全桂七桂全金八飛

袖飛車の駒立は角の睨みあむ方が面白し、然れども角替らざるを得ざる場合には速かに角替りて早く打ち使ふ考ひを爲す可し、若し角を打ち使ふ考ひ附さる節は猥りに角替るは宜しからず、故に此時は下手方五七歩の待ひあむも善し又端に妙手あむ事を見附けて指すも宜し、若し上手方より袖飛車を先きに組れし時は下手方角道を捌きつけて一方より金銀を操上り袖飛車に當るの備ひを爲すへし、然る時は上手方大に苦しむものなり

△第二科 駒落種別

駒落將基ハ上手方より先きに指し出すの例なれば、下手方に於ては初め一通り上手方指し手を受けて指すの心持ちある可し、下手方一通り上手方の指し手を受け了らば夫れより後は順次に敵地に攻め入る手段を回らし、激陣の要塞を打破る謀略を施さば必ず其勝利になること期し得らるべきものなり

總して勝負は機敏の謀略を施すと否とに由て分るものに付き、乃ち其心得あるにあらざれば以て能く其勝算を期し得べきにあらず、其中に就きても駒落將基の極意は、最も機敏の謀略を施すを要す殊に下手方の一步は上手方が取り去れば金銀飛角同一の働きを爲さしむべく、又下手方が一冗手を指さば上手方は五手十手も指し先きん可きが故に、假令一歩たりとも貴重駒を渡りに取り去らる、事を齎め、又冗手を指して其隙に乗せらる、事なく要領を專一とす、是れ駒落將基の極意たり、初心の人豫て之を知り居らすんばある可らず

今駒落將基の最も秘訣と爲す可きものを列記せば左の如くなるなり

第一 駒落し方の弱身ある方へ向つて乗り出し攻め込む可し

第二 歩と金銀飛角共に合して駒落し敵に當るの心得を以て、總じて我駒と駒との縁を稠密に配り置くを要す

第三 指手數少なくて反つて指手數多きに當る緊切肯該の指方あるべし

第四 我飛角を早く敵地に成らしむる考ひを以て指し、且つ我金銀諸駒を漫りに敵に取

り去られざる様に心得べし  
此に列記する四項の意を含み、以下に掲ぐる十番の駒落指方を十日間に毎日一圖ツ、習ひ了る可し、尤も平手の將基にても駒落の將基にても其一ト通り駒立を形造るまでの間に於る指方は、第一科の指手種類に外れるものに非ざれば、深く此意を凝して法則を亂さざる様に指習ふ可きなり

四四角上るは習ひ事なり

# 十日四落六枚

九四の歩最も力あり

桂	銀	王	銀	桂	馬
馬	馬	馬	馬	馬	馬
		馬	馬		
龍					
馬	馬				
	銀	馬	馬	馬	馬
馬		王	金	銀	馬

(説明) 六王三歩八金四角八銀五歩八銀五角七金四歩七春歩九歩七夏金九歩全歩香八金九飛九歩八角全歩九香ナル七銀九飛七銀五飛

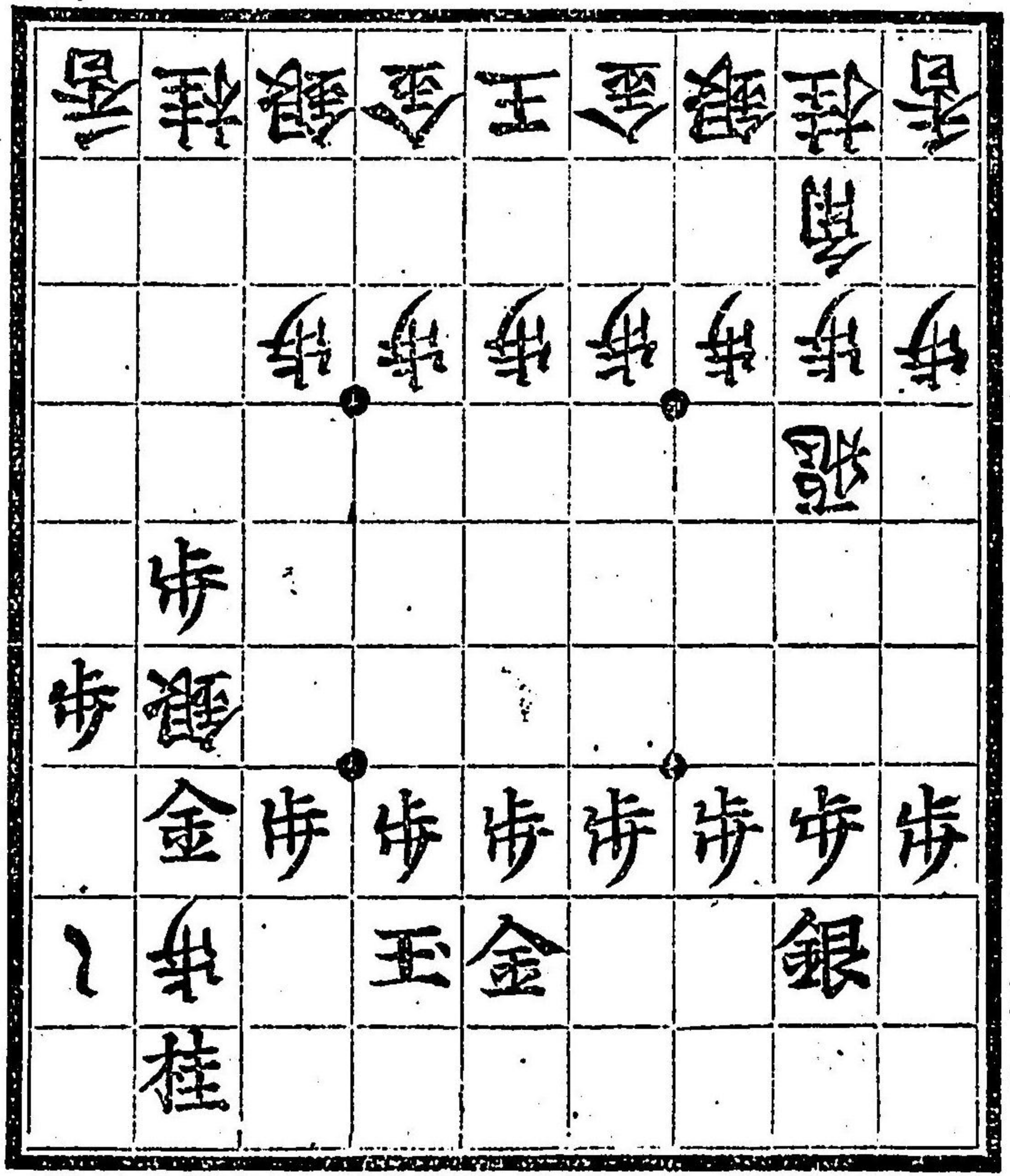
(變化) 春七歩ノ處五歩九歩八歩全角八金四角七歩四歩七銀五歩八王八歩八金九歩全歩香九歩七歩ナル夏七金ノ處七歩全角七金四角六歩四歩七金五歩全歩九歩全歩香七歩九飛七銀七香八銀六金引イ七金ノ處八王八歩全歩香七歩八王七歩九歩九歩六歩ノ處七歩全銀七角ナル

六枚落の將棋は實に天野宗歩より始まる、宗歩は文化十三年江戸本郷に生れ後ち大橋宗桂の門に入り斯道の奥秘を究め、別に一機軸を出して天下の達棋家を畏れ服さしめたり、此れより六枚落の將棋世に行はれ従て其指手に就き利害得失を論する者少なからずと雖も、要するに六枚落の指方は下手方面端歩より突き出し順次飛角の捌き方を附けるを可とす、最も金銀の上り方は飛角の捌きを附けたる後にすべし、殊に下手方四六銀三三桂の指順にして二二飛を廻り或は六八王一七飛成り、遂に香を成らす等の手は下手方の一大口傳と知るべし

八八歩成るか又三四歩を突き出すか二者考ひものなり

日五十五  
落枚五  
除桂左

上手方五八金六六歩の時は下手方三四六六の歩を早く突くべし



五左桂

(説明) 七金九歩八銀九歩五金二飛八歩七金九歩 ナル間 銀九歩八歩九歩 ナル九春 歩八と八銀二飛八王八歩 同歩 飛八歩二飛三銀八歩

(變化) 春九歩ノ處六王八と九銀二飛九イ歩四歩 同歩 同歩 飛八歩二飛三銀八歩 打イ九歩ノ處八王四歩 同歩 同歩 飛八歩八歩九歩六香 同金四飛五香四二飛八銀九と八王九歩 打

五枚左桂落の將基駒立は右の如く下手方指して善しとす、之を要するに上手方左桂落の事ゆえ其左方は桂除きし丈の弱みあり、故に下手方も其心得にて上手方の左り方に向へ一途に攻め破るを肝要なりとす、若し上手方五八金より六六歩六七金の仕掛なる時は下手方三四歩八五歩八六歩と順次に突き出し、我角を轟然に敵地へ押入らしむる手段を用ふ可し、或は上手方に於て三八銀を上りて八六歩を突き出したる節は下手方九八の歩を働かす考ひある可し、或は上手方八六八五へ金銀兩駒を駢ぶることあり、斯る場合には下手方専ら飛先を以て敵に當り、後ち其飛は二五の方へ廻る考ひを爲すを可とす

十六日

五枚落除

上手方四八玉五八金の指順なれば下手方三三桂二五歩なり

四二角に手ありと知る可し

桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂
桂	銀	玉	歩	歩	歩	歩	歩	銀	桂

五右桂

(説明) 三金三歩八銀四角六歩四歩六歩五歩六王五〇角八金五歩七金二歩五歩六歩同歩同香六金二歩一歩八香ナル三銀二飛五歩同歩四歩五歩五金四角一歩ナル全桂四金三飛七金二銀六歩三飛  
 (變化) 〇五角ノ處五歩七金六歩全歩全香六金二飛一歩二角全歩一歩八香ナル三銀一飛六歩ノ處二歩二飛七金二歩全歩全飛六歩全角全金全飛七角二飛一歩二歩ノ處五歩全角七金七角ナル二歩全馬全金全飛七銀九飛ナル三銀六歩打口三角ノ處三銀九飛ナル七六玉九金八銀四角六金全ニ王九銀七王五龍  
 八七王ノ處七銀六歩五角八龍二銀八龍全ニ玉ノ處全金九銀七歩六銀全王七龍八金八金全金七龍  
 五枚右桂落は前の五枚左桂落駒立と反對の心得を以て指す可し、下手方に於て四四へ角を上りたるを上手方が見て二八銀三七金四六金と次第に上り出す時は、下手方一四一五と歩を早く突きて飛を一二へ廻り角を三三へ下る可し、若し上手方二六歩を突き二七金五八金の時は下手方二四歩と指し二二へ飛を廻る可し、尤も角は五五三七に待へよく向け置くものとす

# 十七日 四枚落

上手方七七桂の時は下手方九六歩と突くべし

上手方三八金と上る時は下手方九三桂の上り肝要





(説明) 八銀九歩八金九五歩八歩四一歩八金一歩八金四歩八金七銀八銀四歩八王八銀七歩七銀七桂九桂  
 七王八歩同歩桂イ八歩七桂ナル同銀九歩全歩五桂六銀五歩同歩銀六銀九銀  
 (變化) 春六玉ノ處六歩三銀七歩四銀七桂三桂五銀八歩同桂同銀同歩桂六歩七桂ナル全銀九歩  
 全銀全香五桂九飛四桂ナラス四王三桂ナル全王イ八歩ノ處八銀六桂六銀全角全歩五桂ナル四王七桂  
 ナル全銀八飛六銀ノ處八銀七桂有ナル全銀左全桂ナル全金全角全銀引八飛ナル七桂八龍七角七銀打  
 四枚落の指手は二枚落を指す心持ちある可し、故に始め下手方の指出し方は兩端の駒捌きを

を宜くして上手方の駒捌き不自由ならしむる考ひある可し、又上手方八八金の時に下手方  
 一四歩一五歩と突き出し而して九三桂八四飛と指すは極秘の手なり、又別に上手方八六歩  
 を突き来る時は下手方飛車先さより仕掛るへし、若し上手方七七金の時は下手方九三桂に  
 て受け順次九二へ飛を廻すか、或は二二角を六六へ押出す手順を爲す可し

# 十八日 二枚落

上手方若し四八王四六銀な  
 れば下手方二五歩を早突きの  
 手あるべし

下手方七六歩の突にて勝ち  
 なり

香	桂			王		桂	香
			銀	玉	銀	玉	
歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩
			銀		歩		
		歩	歩	金			
			歩	銀	歩	歩	
歩	歩	歩	歩	銀	歩	歩	歩
		金		玉			
香	桂					桂	香

十八日二枚落 五七

(説明) 八銀四歩六歩五歩六歩五歩六歩五歩七歩四歩六歩五歩七歩七銀七銀七銀八金七銀六銀六銀四銀五金五金右五  
 金四銀四王五銀四銀六歩五歩五歩三金五銀全銀全歩二銀

(變化) 春二歩ノ處六歩七歩五歩四歩三金四歩銀七歩全金七歩全金五角又全銀ノ處三銀五  
 銀五歩二香七歩八歩四銀右六銀七金九歩ナル全銀五角四歩歩二歩八歩六歩七角全桂九歩ナル又  
 四歩ノ處六歩全歩七桂五歩六歩七角全桂四金六王七歩

二枚落は下手方角道を開き其働くに便利なる指方を専らと爲し、次に飛車は二筋八筋兩様に仕掛らる可き備ひを附け、斯くて敵の受けを見たる時は七筋三筋兩様の歩を取替り、其跡に歩を打つ時は既に其將棋は下手方の必勝なり、或は下手方金銀を早く替りて敵の桂先へ打ち込み、桂香を取り以て別に嚴しく敵の堅要の所を打破る秘訣もある可し、若し下手五五歩を突き上手之を取りし時は四六銀二四歩の仕掛なる可し、若し上手三八王の手なれば下手角を先づ五五へ上り八二へ引き四五へ桂を出す可し

九十日  
 飛香落

下手六二銀上りて後手あり

上手七七桂の時は下手六四歩なり

	桂		王	銀	桂	香	
飛					歩		
		歩	歩	歩	歩		
				歩			
	歩	歩					
桂	銀	角	歩	歩	歩	歩	
			王	金	銀	桂	香



(説明) 六歩三歩六歩八歩七歩七角二王七飛三王四王二銀八王九歩六銀九歩五金二金六歩四歩二王九飛九歩飛九飛七銀七歩全飛七夏歩四歩八銀五歩八飛六歩全歩全香七歩全香全桂九歩八飛六歩全銀八歩全飛四歩

(變化) 春九飛ノ處七歩全歩五歩二飛二角ナル全銀七飛七歩四飛三銀三飛四角夏七歩ノ處八飛七歩三銀九歩全歩全香七歩全桂九歩八歩九歩全桂九歩八歩九歩ナル全歩四歩六歩七桂八角六歩七角五桂一六角ノ處六歩七歩八角五桂

總じて左香落の將基は、下手方端歩を早く突くこと大に利あるが如くなれども、或は上手方に相應の受手をされて却て端歩を突き利なきことあり、故に下手方に於て端歩を突き試み若し上手方受けし時は下手方三筋の仕掛を爲す可し、又上手方六八角引の手を指さば下手方は六五歩と突き、我角飛を順よく働かす考ひあるを可とす、又兩居飛車の時は下手方七七桂上らず四四銀五四角の指順なる可し、或は下手方八六歩を六四歩と替て指す手あり、此時は上手方七八に飛を廻るべければ下手方油断なく之を受るの手を考ふべし

落され方四筋飛車角早替りの手あり

廿一日  
右香落

下手方六筋に飛車を廻はすの手あり

桂	桂					桂	桂
	王	王				飛	
	歩	歩	銀	銀	銀	歩	歩
歩			歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	銀	歩	歩	飛	歩	歩
	歩	歩	金	桂			
	歩	王	金				
香	桂	銀					

(説明) 七歩三歩六歩四歩八銀三銀五歩三角五歩五歩五右金四銀六歩二飛七銀二王八王七王八王六銀  
 六歩二王八上ル 金七金七金五銀七桂二金五歩全歩全角四打歩八角四歩六銀六金四歩全歩二飛四歩九歩  
 歩一歩七歩五歩全歩五歩全歩五歩四銀五桂二引角四歩全歩五打歩五金全銀全銀四歩四打歩三打金五歩  
 二飛六歩二金七 歩八飛四飛

(變化) 二歩ノ處六歩八歩七角八歩七銀九歩九歩六歩二銀六歩五歩七銀三銀八飛四王四王三王三王四  
 金四銀三角八王二銀八金四歩八金七歩七銀三桂四銀五歩全歩七角全桂九歩全歩香八飛九飛七金八  
 ナル 香五飛九飛 八飛七飛

古人の言に都て香落將棋は平手の心得にて指すを可とす、故に上手方は右香落の方の痛み  
 あれども其痛みを見せず指來るものゆゑ、下手方其心得ある可しと是れ誠に金言なり、蓋  
 し上手方が初め七三五四の歩を突角の捌きを宜くせん事を計るは、後ちに至り筋違角  
 の手段を方す備ひなれば、下手方も亦た早く其受手を按じ出し油断すべからず、或は下手  
 方早く四四歩四三金と上る手あり、此れは後に至りて上手方を苦しむるに妙手なり

四五歩六四桂の時四四歩四  
 一角の指順にて宜し

廿二日  
 飛車落

飛車落に飛車を振廻すは宜  
 しからず

香					香					香
					桂					
				王	王					
				車	車					
				車	車					
				車						
				歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
				銀	金	桂				
				銀		王				
香										香

(説明) 六歩三歩六歩六銀七金六歩六銀六銀五歩四銀六銀七銀七桂七歩四王五右金八王四玉八銀二  
 王七銀七飛八金七歩全歩全歩七歩二飛六歩一歩六歩九歩六歩八歩四歩四歩二ス金六歩三金四金七金  
 八歩全歩二飛三桂七桂二歩八歩同金八桂七歩七歩四歩八歩五歩八桂八引と三ナル歩八と二と五と一打  
 飛八と九ナル飛七と八引銀五歩

(變化)

銀八金四歩四歩三銀六歩七歩四金七飛三桂四歩一歩九歩六歩三金六歩二金九角五歩全歩全歩七歩七  
 飛八角七金五角七歩全歩全歩七打歩二巡ル飛

大橋宗英は嘗て云ふ「飛落には六五歩早突きの指方、五五歩の指方、七七角替り、七七桂  
 留め、居飛車、引角等の方最も下手方が取て利あり」と夫れ或は然らん然れ共近くは此二三  
 十年來世の達棋家が最も飛落に向ふ極秘の指手は七七角引落し、六七金留め、五七銀留め、  
 四四角、五五銀早替り、四二金と立て、四一王の指手等にて此れ等の指手は將棋の眞相た  
 る指手數少なくて、勝利を期する所以の道に能く契へりと謂つ可きなり

# 廿三日 角行落

五七角上りて別に手を考ふ  
 るも宜し

七五歩と突きかけて宜き手  
 あり



(説明) 六銀七歩八歩、六歩五歩五銀七銀四玉七銀八歩七角三王七飛四銀八王四歩六歩三歩三歩  
四銀八玉二金四銀二金七銀八金五左金八金九角七歩二王四歩八金三桂七金四歩八引銀二飛六歩四歩六歩  
七歩全歩金七銀七金七歩八飛八飛三王八角

(變化) 八歩ノ處五歩六歩六歩六歩八歩七銀六銀八飛五歩七角七歩七銀四玉八王三王四銀  
四銀五銀八王四歩四歩三歩三歩四金三金四歩八金四歩五金七金三桂五銀八金八飛四金九角四王四角七桂八  
銀八引飛七銀二飛六歩全歩全銀八打歩七引銀二歩六歩九歩四歩五歩八飛八歩ノ處五銀七銀四王  
七角八歩七銀八歩八飛三王四王二銀八玉七金八銀八金八王四金七銀四歩八金四歩六歩九歩四歩四  
歩三歩六歩五金五金六金四金三桂六歩四歩七桂二飛九引角三王八飛五歩全歩金六引歩六歩全歩七打  
歩全角六金全銀全飛六打金七打飛八打銀八飛七銀全金全飛八打銀七飛七打銀七飛六打歩八打歩

凡そ角落の將某は、其落方が飛の方へ金を離す時に王の方六七の筋、又は八九の筋より破  
る手が出来るものゆゑ、落され方は其心得にて角を働かすべし  
落方より四四、六六等の處へ金銀を突上げ来る節、落され方より四六、六四等の處へ金銀

を指向けるは思ひべし事にて、斯る場合には其金銀に替るに歩を進むべし  
落方に於て落され方の角の方より攻め掛らずして、右の方より攻め始め來らば落され方は  
漫りに右方を構ふに及ばず、唯た斯る場合には角道を明け飛先を通じ飛角聯合して落方  
の手に應ずべし

落方左四間の手を指し來らば落され方は石田流の意にて待ふべし、總じて角落方は自分の  
飛を何れより使ひ來るか計り知る可らざるに依り、落され方は三三角と上り五四歩の時五  
六歩を見合せて宜し、若し落方にて金を四四六六等の處へ突上げ落され方の飛角が働き  
を止めんと欲せば、早く角を渡して善後策を施すべし又若し落方の指す手何の駒組みと必  
判然せざる時は、落され方は中飛にて向ふを可なりとす

三十間將某獨習新法

乾の巻 尾

○ 告に君諸客基

○ 增野透著

○ 二週圍基速成新法

木版大形全二册

正價金四十錢郵稅四錢

此書ハ斯道ニ達者ト聞エタル増野透氏ガ基理ノ蘊奧ヲ窮メ  
 シト欲シ多年工夫ヲ凝シ遂ニ發見シタル新法ヲ以テ卒業スル  
 法ヲ七科ニ分チ一科ニ日間ヲシ二週間ヲ加エ説明ヲ與ヘシ  
 法ニ己ニ精密ニ記載シ且詳細ナル指圖ヲナリ故ニ初段以下ニシ  
 ナリ實行セハ一朝ニ稱賛ヲ得シ所ナリ故ニ初段以下ニシ  
 ナリ苟モ斯道ニ志有ルノ士能ク茲ニ味ヒ能ク之ヲ守ラハ其  
 速成ノ秘訣ヲ曉ルヤ亦疑ヲ容レズ請フ有志諸君一本ヲ坐右  
 ニ置キ玉ヘ



